病院の実力 ～新潟編 145

股関節の病気

保存療法ベースに手術も

今月は「股関節の病気」を取り上げる。日本股関節学会や日本人工関節学会の研修施設などに2019年の診療実績を調査した。

股関節は、骨盤の外側にあるくぼみ（寛骨臼）で、大腿骨の先端の丸い大腿骨頭を包み込む構造になっている。胴体と両足をつなぎ、体重を支えると同時に、足を前後左右、外側内側に回すなど多様な動きを行う。片足立ちの場合、体重の3～4倍の負荷がかかる。

股関節に痛みが出る病気で最も多いのは「変形性股関節症」だ。関節の軟骨がすり減り、炎症が生じる。発症年齢は40～50歳代が多い。日本人の場合、原因の8割以上は、寛骨臼の形成不全などによるものだ。

前股関節症、初期、進行期、末期と4段階で進行していく。初期は、理学療法士の指導の下、運動療法などの保存療法で痛みの軽減を図る。進行期・末期には、保存療法を続けながら、人工関節置換術などの手術も視野に入れる。

人工関節置換術は、傷んだ関節を取り除き、人工関節を入れる。多くの場合、日常生活や軽いスポーツもできるようになる。正確な位置に入れるためのコンピューター支援手術「ナビゲーションシステム」を導入する施設も増えている。

早期に見つかれば治療の選択肢も広がる。痛みを我慢せずに専門医を受診することが大切だ。

患者に負担をかけないため、変形性股関節症の診療では、運動や生活改善、薬物などで対応する保存療法に力を入れている。

ただ、どうしても手術が必要な場合は、私が開発したCT画像を用いる3次元シミュレーション「ZedHip」（ゼットヒップ）を活用し、正確性を高めている。2019年には、110件の人工関節置換術に取り組んだ。

ゼットヒップは、手術前の計画から手術中の支援、手術後の評価まで幅広く利用できる。人工股関節は大腿骨に入れる「ステム」、寛骨臼の代替となる「カップ」などの金属製部品からなり、一般的な置換術では部品同士がぶつかって脱臼につながるリスクが数％あると言われているが、0・5％に抑えられる。

もう一つの特徴は、できる限り切開部を小さくする「最小侵襲手術」（MIS）を手掛けていることだ。股関節の周囲にあり、体を支える役割を持つ筋肉を保存できる。一般的な置換術では退院までに2～3週間を要するが、1週間程度と比較的短期間で退院できる。

変形性股関節症は、人によって症状の出方に差がある。疑わしい痛みを感じる場合はためらわず、近くの病院を受診してほしい。

全国の調査結果は17日の「安心の設計面」に掲載しました。

小さい切開部 早期退院

富永草野病院（三条市）

伊藤知之

股関節外科部長 48

病院の実力「股関節の病気」

医療機関別2019年治療実績

（読売新聞調べ）

医療機関名	人工関節置換術（件）	ナビシステム（使用＝○、導入予定＝△、予定なし＝×）	保存療法のみの患者数（人）	理学療法士（常勤・人 20年3月現在）
新潟				
亀田第一	191	○	—	17
富永草野	110	—	—	12
新潟市民	60	×	—	15
新潟労災	54	○	653	10
済生会新潟	44	×	—	14
新潟中央	37	×	43	17
富山				
厚生連高岡	64	—	102	—
西能	52	○	1249	23
富山赤十字	19	×	118	11
黒部市民	15	△	107	9

「—」は無回答または不明